

貴重書紹介

ルカ・パチョーリ  
『算術・幾何・比及び比例全書』  
(第2版)

1523年、トスコーラノ、パガニーニ刊

吉田 千草\*

Pacioli, Luca, d. ca. 1514.

Summa de arithmetica geometria. Proportioni, et proportionalita, novamente impressa in Toscolano su la riva dil Benacense et unico carpiosta Laco, amenissimo sito, de li antique & evidenti ruine di la nobil cita Benaco ditta illustrato, cum numerosita de Impatorii epithaphii di antique & perfette littere sculpiti votato & cur finissimi & mirabil colone marmorei, inumeri fragmenti di alabastro porphidi & serpentini. Cose certo lettor mio diletto oculata fide miratu vigne sottera se ritro nano ...

– [In Tusculano : Paganino de Paganini, 1523]

4, [4], 224, 76 leaves : ill. (woodcuts) ; 30 cm. (fol.)

On colophon: "... Con spesa e dilligentia e opificio del prudente homo Paganino de Paganini da Brescia nella excelsa cita di Vinegia ... Neli anni de nostra salute m.cccc.lxliiii. adi. 10. de novembre ... Frater Lucas de Burgo S. Sepulchri ... hanc Summam arithmetice & geometrie, proportionum[ue] & proportionalitum edidit ... Et per esso Paganino di novo impressa. In Tusculano sula riva dil laco Benacense ... adi. xx. decembre, 1523."

Title in black and red.

---

\*よしだ・ちぐさ/整理課

## 1 はじめに

本書の正式なタイトルは『Summa de arithmetica geometria. Proportioni, et proportionalita』である。長いタイトルなので、一般的には『Summa』と通称される。「Summa」とは全体、総体、集大成という意味である。わが国では『算術・幾何・比及び比例全書<sup>1)</sup>』『...総論』『...総覧』『数学大全』などと訳されるが、『スンマ』で呼ばれることが多い。以下、本稿では『スンマ』を使用することにする。

## 2 世界最古の複式簿記文献

全体は2部に分かれており、第1部では主として算術 (Arithmetica)、代数 (Algebra)、第2部では幾何 (Geometria) について論述している。第1部の第9編論説第11に「計算と記録に関する詳説 (Particularis de computis et scripturis)」というタイトルで、198葉裏から210葉裏までの13葉にわたって当時ヴェネツィア商人が使用していた複式簿記\*について組織的で詳細な記述を行っている。この部分は一般的に「パチョーリ簿記論」と呼ばれ<sup>1)</sup>、会計学史上極めて重要な文献として世界的に有名である。

### 第1部第9編論説第11「パチョーリ簿記論」

---

\*すべての取引を借方・貸方に分けて記入したのち、各口座ごとに集計し転記する方式。貸借平均の原理により、資産の移動や損益の状態を正確に知ることができ、記帳の偽りや誤りも同時に確認できる。現在の企業会計の根本をなす。(『大辞林』第2版 三省堂)

それは、複式簿記について世界で初めて論述された印刷出版物であるからである。そのために著者のルカ・パチョーリは、近代会計学の父 (the father of modern accounting) と呼ばれている<sup>2)</sup>。

アメリカの会計学者リトルトン (A.C. Littleton) は、次のように述べている<sup>3)</sup>。「ある問題について初めて書かれた著書が、その学問をその後にならぬと支配することは、めったにないことである。以後150年にわたってイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクに現われた簿記書は、良いものでもパチョーリ簿記論の改訂であり、最悪のものになると原著者にことわりもなくそのまま転記したものに過ぎない」。そして驚くことに、『スヌマ』に論述された複式簿記は、ほとんどそのままの形で現代の簿記システムに反映され、現代の企業において使用されているのである。

『スヌマ』は、それを語らずして近代会計学を語るこのできないほど極めて重要な文献なのである。

### 3 著者ルカ・パチョーリについて

#### 3.1 生涯

パチョーリの生涯については、多くの研究がなされている。資料<sup>4, 5, 6, 7, 8, 9)</sup>を参考にして彼の生涯について簡単にまとめると、次のようになる。

1445年頃にイタリア中部のボルゴ・サン・セポルクロの貧しい家庭に生まれた。同じ町の出身で、画家、数学者であり、遠近法の研究をしたピエロ・デラ・フランチェスカ (Piero della Francesca) が有名である。パチョーリは彼から絵画と数学とを学び、多大な影響を受けたといわれている。その頃パチョーリは、ピエロ・デラ・フランチェスカとともにサン・セポルクロから50マイル離れたウルビーノにしばしば行き、ウルビーノ公フェデリゴ・ダ・モンテフェルトロ (Federigo da Montefeltro) の蔵書で構成される図書館に自由に出入りする許可を得て、よく利用していたらしい。ピエロ・デラ・フランチェスカは、パチョーリを建築家、画家、彫刻家、音楽家、詩人、哲学者として名声を得ていたレオン・バッティスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti) に紹介した。

アルベルティの紹介により1464年19歳で当時のイタリアの中心地であるヴェネツィアに行き、豪商の3人の息子たちの家庭教師となった。この頃に簿記の知識を吸収し、数学研究を始めたといわれている。

1470年25歳のときにローマへ行き、フランチェスコ派僧団に入団した。その後イタリア各地を移住し、数学教師としてペルージャ大学、ローマ大学、ナポリ大学で教鞭をとった。1490年初め頃にしばしばウルビーノの図書館を訪ね、『スンマ』出版の準備をすすめた。そのときに、旧友ウルビーノ公フェデリゴの嗣子グイドバルド (Guidobaldo) と親交を結んだ。

1494年49歳のときに再びヴェネツィアに行きパガニーノ・デ・パガニーニ (Paganino de Paganini) の工房から『スンマ』を出版し、大評判を得たということである。この頃のパチョーリの名声は高く、どこの大学の講義も大盛況であったと伝えられている。そして、『スンマ』にたいへん興味を抱いたレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) と知り合うことになった。レオナルドとパチョーリの親交の深かったことは有名である。パチョーリは1509年には、ユークリッド幾何学の翻訳・解説書と『神聖比例』を同じパガニーニの工房より出版しているが、『神聖比例』の本文71章と補遺20章にある多面体の挿図60葉はレオナルドの作品である<sup>10)</sup>。

1514年69歳のときに、ローマ法王レオ10世の招聘を受け、ローマ大学で教授職についた。これは、彼にとってたいへん名誉なことであったと思われる。

1517年72歳でその生涯を終えたとされている<sup>†</sup>。パチョーリの遺言書が現存しているが、それによると彼は一生を通じて独身であり子供がなかったので、自分の財産を甥と甥の妻や娘に相続するよう記述している<sup>7)</sup>。

パチョーリの生誕地であるボルゴ・サン・セポルクロでは、現在、パチョーリの功績をたたえて「ルカ・パチョーリ通り」や「ルカ・パチョーリ中学校」や「ルカ・パチョーリ商業専門学校」などの名前がつけられ、この町の図書館では『スンマ』の初版が堂々と飾られている<sup>7)</sup>。また、パチョーリの記念碑も建てられている。ボルゴ・サン・セポルクロの人々がいかにパチョーリを誇りに思い、そして大切にしているかを改めて感じさ

<sup>†</sup>なお、NACSISの総合目録データベースの著者標目に付記されている没年は、1514年になっている。

せられる。

### 3.2 肖像画

『スヌマ』には木版の装飾頭文字 (ornamental initial) の L が刷り込まれ (後述)、その中には僧侶と思われる人物が、開いた本の前に立っている姿が描かれている。これがパチョーリ自身を描いたものであるといわれている<sup>6)</sup>。

パチョーリの肖像画でもっとも有名なものは、1495年にヤコポ・デ・バルバーリ (Jacopo de Barbari) によって描かれたナポリ国立博物館に掲げられている画である。この画には、パチョーリとグイドバルドが描かれている。パチョーリの右手は、ユークリッドの幾何学図形を指示棒で示している。そして左手は、開かれた本の上にのせられている。右前方の留め金がかけられた厚い本が『スヌマ』であると考えられている<sup>11)</sup>。

かつてウルビーノのサン・ベルナルディーノ聖堂にあり、現在はミラノのブレラ美術館に所蔵されているピエロ・デラ・フランチェスカの「聖母子」には、6人の聖者と4人の天使に囲まれた聖母子とウルビーノ公フェデリゴが膝まつている姿が描かれている。その中で右から2人目に立つ殉教者聖ピエトロは、パチョーリの肖像であるといわれている<sup>12)</sup>。ヤコポ・デ・バルバーリの描いた肖像画と比較してみると、両者はとてもよく似ている。

### 3.3 呼称

『スヌマ』に著者名として記述されているのは Frater Lucas de Burgo S. Sepulchri であり、日本語にすると「ボルゴ・サン・セポルクロ出身の修士ルカス」になる。姓をつけた名はどこにも記述されていない。

パチョーリの正式な呼称については、これまでに世界中で様々な学術的論争があった<sup>5, 7, 13)</sup>。彼の他の著書にラテン語形の Lucas Paciulus という記述が見られるため、ラテン語形はこの Lucas Paciulus であることがはっきりしている。問題はイタリア語形である。パチョーロ (Paciolo) かパチョーリ (Pacioli) かで学説は真っ二つに分かれている。Pacioli という

のはイタリア語名 Paciolo の複数形である。

(1) パチオーロ説：単数形の Paciolo をつけて Luca Paciolo である。

(2) パチオーリ説：ルカという名前をつけて呼ぶときは、パチオーリ家のルカという意味で複数形の Pacioli をつけて Luca Pacioli である。

現在ではどちらかといえばパチオーリ説のほうが主流であり、日本においては一般的にルカ・パチオーリ (Luca Pacioli) と呼ばれている。

## 4 書誌学的考察

当館が1998年度の図書館特別資料費で購入したこの第2版と、初版とを書誌学的に比較検討してみたい。

### 4.1 初版

当館では初版原本は所蔵していないが、初版のファクシミリ版<sup>14)</sup>があるのでこれで確認をし、さらに様々な書誌解題を参考にしてみたい。

初版には3種の異版が存在していて、全体の28葉に相違が見られる<sup>9)</sup>。これら3種は、かつて数学史家バルダッサレ・ボンコンパーニ (Baldassare Boncompagni) が便宜的に A、B、C として分類したが、今日ではイタリアのインキュナブラ所在目録 *Indice generale degli incunaboli delle biblioteche d'Italia* (IGI) の番号 7132 (= A)、7133 (= C)、7134 (= B) が区別に用いられている<sup>9)</sup>。ファクシミリ版は、複数の原本からコンディションの良い頁のみを組み合わせているということなので、一概にこの分類を用いることはできない。

#### [活字]

活字は15世紀に典型的なゴシック体である<sup>9)</sup>。

#### [形態]

全体の丁数は4、[4]、224、76葉で、紙葉の表裏に印刷がされているが、丁付けは紙葉表の右肩にのみ印刷されている。

まず最初の紙葉はタイトルページである。タイトルページを含めて、前付部分が8葉あり、その次に丁付けを新たにして1葉から224葉までが第1部である。その後、新たに丁付けが始まり、1葉から最終葉の76葉までが第2部である。

木版による挿図が多数含まれている。

#### [タイトルページ]

第1葉表のタイトルページには、タイトルがあり、その下に本書の目次 (Continentia de tutta lopera) という見出しがあり、その下に40行にわたって目次項目が記述されている。刊記は記述されていない。装飾は全くなく、黒インクのための1色刷りである。

#### [前付]

2葉表から4葉表にかけてにはウルビーノ公グイドバルドへの献辞が見られる。その中で、グイドバルドの従兄弟でありグイドバルドの父フェデリゴの会計官であったオッタヴィアーノ・ウバルディーニ (Ottaviano Ubaldini)、ジョバンニ・ピエトロ・アッリヴァベーネなど、ウルビーノにおける友人たちの名前をあげて、彼らの援助を感謝するとともに、誤りを指摘し訂正するように望み、拡大の必要があるときには補足することを躊躇しないように、と望んでいる<sup>11)</sup>。出版に必要な資金を提供したマルコ・サヌート (Marco Sanuto) への感謝の言葉も述べられている。マルコ・サヌートは、名門サヌート家の貴族で数学の教授でもあり、後にアルドゥス・マヌティウス (Aldus Manutius) の出版事業にも関わったことでも知られている<sup>7, 9)</sup>。

献辞に続く4葉裏から5葉表にかけては Summario de la prima parte principale と題して主要部分の概要を5つに分けて述べている。

5葉裏から8葉裏までは Tauola de la prima parte principale と題して各紙葉の概要が詳細に記述されている。

#### [刊記]

第1葉裏の最終行には、印刷年月と印刷地と思われる「1494年11月ヴェ

ネツィアにて」という記述がある。1450年から60年頃にグーテンベルクにより印刷術が発明されたことを考えると、印刷物としてもたいへん貴重なものであり、インキュナブラの1冊である。

第1部の224葉裏最終行にも、印刷年月日の記述が見られる<sup>9)</sup>。

詳細な刊記は、奥書 (colophon) に記述されている<sup>‡</sup>。奥書によると、初版は1494年11月10日に、当時印刷出版の最大の中心地であったヴェネツィアでパガニーノ・デ・パガニーニによって出版された。パチョーリとパガニーニの関係は、1490年代初めにウルビーノの司教となり法王イノセント8世の秘書官を務めたジョバンニ・ピエトロ・アッリヴァベネ (Giovanni Pietro Arrivabene) がパチョーリの友人であり、アッリヴァベネ家の一員ジョルジオ・アッリヴァベネ (Giorgio Arrivabene) が1483年から1486年までパガニーニの共同経営者であったので、この司教を通じて『スンマ』出版の依頼がなされたものと考えられている<sup>6, 9, 11)</sup>。以後10年間は他の者が再出版できない、という出版上の特権が与えられている。そして、奥書の最後の一文「印刷工房で日夜手伝いをして、自分自身で正しく校正した。(Ac impressoribus assistens die noctuq[ue] proposse manu propria castigavit.)」から、パチョーリ自身がこの出版に大きく関わったことがわかる。

#### [第1部1葉]

本文の第1部1葉は、3種の異版により異なっている<sup>9)</sup>。

7132 (= A): 囲み飾り (border) あり。パチョーリの肖像を描く装飾頭文字L。

7133 (= C): 囲み飾りなし。頭文字Lはガイドレターのみ。

7134 (= B): 囲み飾りなし。植物文様付きの装飾頭文字L。

ファクシミリ版では、木版の唐草風の囲み飾りがあり、活字は赤と黒の2色刷りで、パチョーリと思われる僧侶の姿の装飾頭文字Lが刷り込まれている。ファクシミリ版の第1部1葉には、7132 (= A) の紙葉を用いていると思われる。このパチョーリの姿を描いた装飾頭文字Lは、その他数

<sup>‡</sup>16世紀初頭までの刊本の出版・印刷情報は、大抵奥書にある。これは、写本の記述方式を受け継いでいるものと考えられている。

箇所で使用されている<sup>15)</sup>。

## 4.2 第2版

### [保存状態]

当館所蔵本は、濃い藍色で霧染め模様のある板紙 (sprinkled board) による製本で、赤い背ラベル (spine label) があり、その上に Lucas de Burgo / Summa de arithmetica と金で印字されている。表紙の左の上端には、獅子の絵柄の入った図書館の配架ラベルらしきものが貼付されている。比較的新しい19世紀の製本と思われる。隅と背表紙の上は、少々擦り切れている。

タイトルページと第1部1葉表には木版の唐草風の囲み飾りがあるが、その囲み飾りのぎりぎりまで裁断されている。

第1部1葉表の木版の囲み飾りには、少々破損がある。また、第2部69葉の余白部分の中間にある木版の幾何学図形部分の破れが、きれいに修復されている跡がある。第2部70葉の上端の幾何学図形にかかる部分も、同様である。よく見るとこの修復部分は、破れてなくなってしまった部分を別の紙 (ファクシミリ複写か) で補って修復をしているように思われる。また、最後の3葉には小さな穴が貫かれていて、本文の一単語にかかっている。その他に目立つ破損はなく、保存状態は良好であるといえる。

### [料紙・活字]

料紙には手漉きの木綿紙を用い、インクは植物性でとても鮮やかである<sup>6)</sup>。

活字はゴシック体であるが、ストロークの先端がいくらか二又に割れており、16世紀風のゴシック体といえる<sup>9)</sup>。

### [形態]

全体の構成は、初版と全く同様である。全体の丁数は4、[4]、224、76葉で、表裏に印刷されているが、丁付けは紙葉表の右肩にのみ印刷されている。本書を開くと最初の紙葉はタイトルページである。タイトルページを含めた前付部分が8葉ある。次の第9番目の紙葉からは本文になってい

て、新たに1から丁付けが始まり、1葉から224葉までが第1部である。その後、新たに丁付けが始まり、1葉から最終葉の76葉までが第2部になっている。

大きさは30cmである。前述したように製本のために裁断されているので、アンカットのものは恐らくもう少し大きいと思われる。厚さは、製本部分を除くと約4cmである。

1紙葉には最大58行と見出しが刷り込まれている。

欄外には全体を通して、木版の幾何学図形が多数刷り込まれている。初版と比較してみると、挿図の内容は全く同じであるが、よく見ると別の版木を使用していると思われる。第1部36葉裏には一面を使用して、指を折って数を表現した手の図（相場などで使用する手振りのように思われるが、未調査である）が9つずつの4列、合計36図あり、それぞれ1-9、10-90、100-900、1000-9000の数と対応している。図版として見ても、たいへん面白いものである。また、第1部82葉表では一面を用いて、*Proportio et proportionalitas* と題された比と比例の樹形図が赤と黒の2色刷りで印刷されていて、とても美しい。

#### [タイトルページ]

第1葉のタイトルページには、前述のように唐草風の模様の囲み飾りがつけられていて、赤インクでタイトルが印刷されている。その下は、赤インクで逆三角形をかたどるように活字が並べられ、トスコラーノで新たに印刷されたという記述と、当地の風景描写が延々と続いている。このように印刷地の風景や風物の描写をするというスタイルは、当時の出版物によくあるものなのだろうか。タイトルページにはその他の刊記はなく、続いて本書の目次（*Continentia de tutta lopera*）が記述されている。目次の見出しもまた赤インクで印刷され、その下に目次項目を黒インクで、2段組みにして記している。デザイン的に見ても非常に美しい。初版のタイトルページはこれとは対照的に、囲み飾りはなく、黒インクのみを用いている。初版と第2版出版の30年の間に、書物としての体裁が格段に整えられたことがうかがわれる<sup>16)</sup>。書物の身元を明示するタイトルページは1475年から1480年にかけて登場したと考えられる<sup>17)</sup>。この初版と第2版の夕

イトルページの違いは、タイトルページが成立する過渡期の1ページを垣間見ているようで、とても興味深い。

[前付]

初版と内容が全く同様なので、ここでは省略したい。

[刊記]

初版にあった1葉裏の印刷年月日の記述が、第2版には存在しない。

第1部224葉裏最終行には、印刷年月日の記述が見られる。「1523年11月10日...20日 (decima novembris ... die vigesima ... M.CCCCC.xxiiij)」となっている。この月日部分は初版と同じである。奥書(以下に詳述)の月日とは異なることからみても、年部分だけの変更したが、月日部分の活字は誤って初版の月日で印刷したと思われる<sup>9)</sup>。

詳細な刊記は、第2部最終葉である76葉にある奥書に記述されている。奥書の21行目までは初版の刊記がそのまま記述されている。そして、1行分のスペースを空けて22行目から25行目まで、第2版についての刊記が付け加えられた形になっている。奥書によると、第2版は初版から約30年後の1523年12月20日に、場所を移してベナチエンセ湖畔のトスコラーノ (In Tusculano sula riva dil laco Benacense) で初版と同じパガニーノによって印刷された (Et per esso Paganino di novo impressa. )。前置詞の per は当時のイタリア語において「～によって」「～に代わって」「～のために」などの多くの意味がある。また、代名詞の esso も形容詞的用法や強調の用法などが考えられる。よって、この一文は「彼パガニーノによって新たに印刷された」、「かのパガニーノに代わって新たに印刷された」、「かのパガニーノのために新たに印刷された」などのように解釈が様々にできる。また、その他の周辺の書誌学的考察からも、第2版が初版と同じパガニーノによって出版されたという説と、パガニーノの息子で共同経営者であるアレッサンドロ (Alessandro) によって出版されたと推定する説の両説がある<sup>9)</sup>。奥書にもタイトルページと同様に、出版地トスコラーノの風景描写が記述されている。

パチョーリが1517年頃に亡くなったことを考えると、第2版は死後に出

版されたことになり、著者による校訂はなかったものと思われる。

[第1部1葉]

第1部1葉には木版の囲み飾りがあり、活字が赤と黒のインクの2色刷りになっている。上から5行目冒頭部分には、12行分の高さのパチョーリらしき僧侶の木版装飾頭文字Lが印刷されている。これらのことから、第2版は7132 (= A)に基づいて組版を行ったと考えられる<sup>9)</sup>。パチョーリの肖像を描いた装飾頭文字Lは、第2版ではこれが唯一のものであり、他には使用されていない。

第1部第1葉

### 4.3 初版と第2版の比較

初版と第2版はどのような違いがあるのか。初版のファクシミリ版と第2版とを手元に比較を試みた。他の書誌解題を参考にしながら違いをまとめると、次のようになる。

- (1) 第2版は活字、木版による頭文字 (initial letter) が新しくされていて、初版に比べると文字が読みやすくなっている<sup>9)</sup>。
- (2) 各章本文の頭文字は、第2版のほうが装飾頭文字が少なくなっている<sup>15)</sup>。
- (3) 初版はヴェネツィア地方の方言によって多くの略語が使用されていて、非常に難解であるが、第2版では標準のイタリア語へ修正されているものが多く、初版に比べるととても読みやすくなっている。  
[例] po → pero (しかし) cō → con (ともに) pip → piper (胡椒) など<sup>1)</sup>

- (4) 句読点が見易く変えられた箇所がある<sup>15)</sup>。
- (5) 初版にあった誤植が第2版では修正されている<sup>15)</sup>。
- (6) 初版は、固有名詞の頭文字は小文字が多かったが、第2版では大文字に修正されているものがある<sup>15)</sup>。
- (7) 図版の版木は、初版と第2版では別のものが使用されている。
- (8) 第2版では段落記号とキーワード<sup>§</sup>が印刷されている<sup>9)</sup>。
- (9) 折記号が若干異なる<sup>9)</sup>。

初版と第2版にはこのような違いがあるが、全体の紙葉数は変わっていないし、文章もほとんど変わっていない。第2版は、当時の印刷事情や趣向を考慮して組版を行ったものであり、全体的に16世紀風の姿に改版されたといえる<sup>9)</sup>。

## 5 言語

当時のヨーロッパでは、ラテン語が知識階級の共通言語であり、法令、証書、年代記など社会的に重要な文書はもとより、著作、討論、説教などには、ほとんどラテン語が使用されていた。しかし、『スンマ』で使用されているのはラテン語ではなく、庶民の言語である当時のイタリア語である。パチョーリは献辞の中で、このように述べている。「多勢に対しはつきりさせるために、ラテン語による、あたかも時間の無駄のような難しい語句を使わず、民衆への理解にすぐれた、(書物に)稀な言葉を使う<sup>15)</sup>。(E perche a li tempi nostri la chiara notitia de lor scabrosi termini fra li latini quasi e de perdita, per la rarita de buoni perceptoriche la dimostrino.)」。彼は、貴族だけにではなく多くの一般の人にこの書を理解してほしいがために、あえてラテン語ではなくイタリア語を使用したものであり、これは大きな特徴のひとつである<sup>6)</sup>。この事実は、『スンマ』が数学の専門家のみを

<sup>§</sup>キーワードとは、最終行の後の下端に印刷する語句で、次ページの冒頭にくる語を表示したもので、製本師を導くためのものである。

対象として書かれたものではなく、広く商人などの一般大衆をも対象として書かれたものであることを明確にあらわしている。

## 6 翻訳書

『スンマ』全文の翻訳は未だになされていない。今後、大いに望まれるところである。

第1部第9編論説第11「パチョーリ簿記論」については、16世紀以後全ヨーロッパへ伝えられ、影響を受けた簿記書が次々に出版された。そして、19世紀に入ってから次々に翻訳書が出版され、今日までに英語で4冊、日本語で4冊、イタリア語で3冊、ロシア語で3冊、チェコ語で2冊、ドイツ語で2冊、スペイン語で2冊、中国語で2冊、オランダ語で2冊、フランス語で2冊、ポーランド語、ルーマニア語、トルコ語、ポルトガル語で各1冊ずつ、と非常に多くの言語の翻訳書が出版されているのである<sup>18)</sup>。世界中の会計学に莫大な影響を及ぼしたことを物語っているといえよう。

なお、当館が1999年度図書館特別資料費で購入したエルヴィン・ゲルトマッハー (Erwin Geldmacher) 教授の旧蔵書の中に、ドイツの会計史学者バルドウィン・ペンドルフ (Balduin Penndorf) による正確かつ権威あるドイツ語翻訳書『Abhandlung über die Buchhaltung 1494』(Stuttgart : C.E. Poeschel, 1933) が含まれている。

## 7 国内外の所在

『スンマ』は、初版、第2版ともに印刷部数はまったく不明である。当時の書物の平均的な発行部数は、1480年から1490年頃には400部から500部、16世紀初頭は1000部から1500部といったところで、また時にはそれよりはるかに少ない事例があった<sup>17)</sup>と考えられている。資料<sup>19)</sup>によると、『スンマ』は初版が99部、第2版が36部残存しているといわれている。日本における所在は以下のようなものである(ただし、文献や目録などにより知りうるもののみを挙げている)。

[初版] 大阪学院大学図書館、大阪商業大学図書館、神奈川大学図書館、慶應義塾大学図書館、神戸大学附属図書館、日本大学商学部図書館、早稲田大学図書館<sup>20)</sup>

[第2版] 大阪学院大学図書館、神奈川大学図書館、慶應義塾大学図書館、神戸大学附属図書館、日本大学商学部図書館、早稲田大学図書館、明治大学図書館

## 8 おわりに

『スンマ』は近代会計学の原点ともいえる書であり、また初期の印刷物として、書誌学的に見ても非常に貴重な書である。本学図書館に第2版が所蔵されたことは、たいへん意義のあることと思う。これを機に、ぜひ初版の収蔵を検討することを願うものである。

## 引用及び参考文献

- [1] 片岡泰彦 「“パチョーリ簿記論”の特徴に関する問題点」 『会計』 第146巻第6号 1994
- [2] 片岡泰彦 「パチョーリと世界最初の複式簿記文献」 『第18回西洋社会科学古典資料講習会』 一橋大学社会科学古典資料センター 1998
- [3] Littleton, A.C. Accounting evolution to 1900. Repr. of 2nd ed. 1966. New York, Garland Pub., 1988
- [4] 片岡泰彦編 『我国パチョーリ簿記論の軌跡』 全2巻 雄松堂書店 1998
- [5] 泉谷勝美 「ルカ・パチョーリに関する若干の問題」 『経営経済』 第4号 大阪経済大学 1967
- [6] 小島男佐夫 「“ズムマ”について」 『商学論究』 第20巻第3号 関西学院大学 1973

- [7] 片岡泰彦 「世界最初の複式簿記文献」 『ピヌス』 第29号 雄松堂書店 1990
- [8] 岸悦三 「パチョーリ簿記論の成立」 『会計』 第146巻第3号 1994
- [9] 雪嶋宏一 「パチョーリとパガニーニ」 『南欧文化』 第16号 文流出版 1995
- [10] 久保尋二 『宮廷人レオナルド・ダ・ヴィンチ』 平凡社 1999
- [11] Taylor, R. Emmett. No royal road : Luca Pacioli and his times. New York, Arno Press, 1980
- [12] Venturi, Lionello. Piero della Francesca. Genève, Skira, c1954
- [13] 江村稔 「ルカ・パチョーロの名前の綴り方に就ての論争」 『経済学論集』 第17巻第3号 東京大学 1948
- [14] Pacioli, Luca, d. ca. 1514. Summa de arithmetica, geometria, proportioni et proportionalita. Facsimile reprint of the 1494 ed. Tokyo, Yushodo, 1989
- [15] 本田耕一訳 『パチョリ簿記論』 現代書館 1975
- [16] 東田全義 「パチョーリ“ スムマ ”の書誌学上の謎」 『ピヌス』 第37号 雄松堂書店 1994
- [17] L. フェーブル、H.J. マルタン著、関根素子 [ほか] 訳 『書物の出現』 上 筑摩書房 1985
- [18] 片岡泰彦 「“ パチョーリ簿記論 ”の翻訳書」 『ピヌス』 第43号 雄松堂書店 1997
- [19] Pacioli, Luca, d. ca. 1514. Paciolo on accounting, translated and edited by R. Gene Brown, Kenneth S. Johnston. New York, McGraw-Hill, 1963
- [20] 雪嶋宏一編 『本邦所在インキュナブラ目録』 雄松堂出版 1995